

宗門が社会に 捧げた大学

里雄 康意

●真宗大谷学園理事長

文部科学省は、大学改革実行プランにおいて「社会の変革のエンジンとなる大学づくり」を掲げ、予算の戦略的配分などに着手している。わが国が目指すべき社会の形成に、大学の果たす役割はますます重要になっている。

「数値化」や「見える化」などの工夫をいくら凝らしても、本来の意味で教育のもつ力を推し量ることは困難であろう。しかし、予算配分など「お金」は比較可能な一つの重要な指標であることは間違いない。

本学園の収入構成から言えば、その七〇％は学納金であり、学生生徒園児の皆さん、そして保護者の皆さんの大きな期待を担っていることは言を待た

ない。学園にとって最も重要なステークホルダーであり、学園はその期待に応える義務があり、十分に応えられなければ学園存立の意義を見失うことになる。

二番目は一四％を占める補助金である。補助金の原資は言うまでもなく国民の税金であり、学園は公共的機関として国民の皆さんから大きな期待と信頼をいただくことによつて成り立っている。私がいつも思い浮かべるのは、額に汗して畑仕事をする人、バスの運転手さん、理髪店のご主人などなど、実に数多くの方々から、次代を担う若者を立派に育ててほしい、という声な

き声をいただいている、ということである。教育に関わる者の一人として、その責任に心しなくてはならない。

次に、他の私学では手数料や事業収入が入るのかもしれないが、本学園では寄付金が三番目となっている。先の二つからすれば割合は少ないが、ここに本学園の大きな特徴がある。

寄付金には、同窓生や保護者の皆様をはじめ有縁の方々から寄せられた寄付のほか、真宗大谷派（東本願寺）からの助成金が含まれている。この助成金は、全国のご寺院、ご門徒からの浄財であり、この学園はお念仏の声によつて支えられているのである。かつて昭和四十年ころまで、収入の三割以上

が東本願寺からの助成で賄われており、本学園は東本願寺の設立に係る教育機関を継承して、これを経営し維持することを目的としていることからすれば、今日に至ってもその根本は何ら変わる場所がない。本学園の中核をなす大谷大学は、「宗門が社会に捧げた大学」と称されるゆえんである。

大谷大学は、寛文五（一六六五）年に東本願寺の僧侶養成機関として創設された。創設当初の壁書の写しが残されているが、その第一に「位階の高下、官職の勝劣を論ぜず、着帳次第、列席これあるべきこと」とある。当時の封建社会にあつて、学問や人の養成が何よりも重んぜられたことがうかがわれる。

また、元治元（一八六四）年の蛤御門の変によつて東本願寺の壮大な伽藍はすべて焼け落ち、一刻も早い再建が待たれる中、明治維新による激動の時代なればこそ、人の養成が急務である

として、再建に先んじて学制の大改革が行われた。このとき、大谷中高等学校が創設されている。

このように、歴史的に見ても本学園の精神は「人の養成」に尽きると言つても過言ではない。

そしてもう一つの重要な点は、宗教と教育の関係性である。大谷大学第三代学長の佐々木月樵は、「そもそも、国民の精神的要素は、いふまでもなく宗教と教育とである。然も、教育は常に宗教を俟つて真実の人格を作り、宗教は教育によつてのみ常にその陥り易き所の迷信に陥ることを防ぐのである」と述べ、大谷大学の社会的使命を明確に示している。真の人間教育を実現するうえで、宗教と教育の積極的連関が不可欠であり、現在の国民教育のうえに重要な意義をもつものであることを、われわれは確信している。

今最も求められている教育とは、相互敬愛の心をもつて人間関係を開き、

粘り強く事に臨むための努力を惜しまない、いわば人間力をもった人を育てることである。本学園の、自信教人信の誠を尽くす人物を養成するという使命は、人間力を備え、仏教の智慧のもとに、潑刺とした意欲をもつて生きる人物を養成するということにはかならない。

宗門が社会に捧げた大学・学園として、その責務遂行に全力を尽くし、新たな未来を築く礎となることを願つてやまない。

